

# 『吾妻鏡』における八幡神使としての鳩への意味付け

Historical interpretation of doves as divine messengers  
of Hachiman in *Azuma Kagami*

池田 浩貴

<abstract>

*Azuma Kagami*, the official history book compiled by the Kamakura shogunate, has many records of bizarre behavior of various organisms. Such records were kept because unusual natural phenomena including the behavior of organisms, which occurred around the Kamakura shogunate, were believed to be omens or cautions from heaven and gods or ancestors for future events or terrible disasters. Doves were one of the most frequently recorded animals in *Azuma Kagami* and have been and still are regarded as divine messengers of Hachiman.

Doves were both auspicious and evil omens. In the Kamakura era of Minamoto no Yoritomo, we can see two good omens for the Kamakura army signified by doves in *Azuma Kagami*. When central figures of the Taira clan were drowning themselves in the last instance of Battle of Dan-no-ura, it is said that two doves were flying over the Taira's ship. In the Battle of Oshu (between the Kamakura shogunate and Oshu Fujiwara), a banner on which two doves were embroidered was brought from Kamakura to Oshu.

Conversely in the era of Minamoto no Yoriie and Minamoto no Sanetomo, doves were bad signs. About two months before the forced abdication of Yoriie, carcasses of doves were found three consecutive

times in Tsurugaoka Hachimangu. Just before the assassination of Sanetomo, a gokenin had a dream in which a dove was killed. On the day Sanetomo was assassinated, a dove repeatedly twittered.

After the death of Sanetomo, almost no records of doves were kept in *Azuma Kagami*. Thus doves were strongly linked to three shoguns of Seiwa Genji. Doves were given the role as divine messengers of auspicious or evil omens from Hachiman to Genji in *Azuma Kagami*.

## はじめに

『吾妻鏡』には、災害や天体運動、また光物・天狗・異形のものとの出現といった、今日的に見れば超常現象と見なされるものなど、様々な自然現象が豊富に記録されている。こうした現象が公式の史書に記録されたことは、源頼朝以来<sup>(一)</sup>、鎌倉幕府が京都から陰陽師を招聘して徐々に陰陽道を吸収し<sup>(二)</sup>、鶴岡八幡宮を祭祀の中心に<sup>(三)</sup>、政治体制の一部として幕府により構築されていった鎌倉陰陽道<sup>(四)</sup>との関連が深い。鎌倉幕府は、鎌倉に発生する、あるいは各地から鎌倉に報告される<sup>(五)</sup>様々な自然現象を天・神・祖先等からの警告や予兆と捉え、その意味する内容を読み取って知り<sup>(六)</sup>、祭祀や謹慎等の適切な対処を取ることで災厄を回避するという一連の対処を政務の一部としていた。それは初期には朝廷の模倣から始まり、徐々に独自のシステムとして確立されていったものである<sup>(七)</sup>。また、このような政務手続きのきつかけとなる、古代中世の人々に奇異の念を与えた自然現象を怪

異と総称し、歴史学の研究対象とする研究動向も徐々に広まりつつある<sup>(八)</sup>。

『吾妻鏡』にこのような事由により記録された自然現象の中には、多種多様な生物に関する記事も含まれる。その記録対象は、牛馬や犬のような家畜に留まらず、狐などの獣、鷺・鳩・鳥などの鳥類、蛇や魚類、蝶や羽蟻等の昆虫類など、およそ鎌倉の人々の周囲に生息する広範な生物に及ぶ<sup>(九)</sup>。これらの生物による現象のうち、黄色の蝶が鶴岡八幡宮を中心に大量発生して飛行する「黄蝶群飛」と、鷺の類が主に將軍御所に現れ、人々に奇異の念を与える「鷺怪」について、既に拙稿において考察した<sup>(一〇)</sup>。そして、二つの現象の多くが、和田合戦・寛喜の飢饉・宝治合戦等、幕府を揺るがす戦乱や災害の前後に集中していることを指摘した。黄蝶群飛や鷺怪の中には、記事そのものが改竄によって生み出された可能性が疑われるものも存在するものの、そうした現象が発生すること自体は生物学的にありふれたことであり、幾度となく観察・記録されたこれらの現象のうち、偶然戦乱や災害の前後に発生した事例のみが『吾妻鏡』に採録され、事件を

予兆するもの、あるいは事件を人々に追憶させるものとして語られていたと結論づけた。

本稿で取り扱うのは、管見の限り『吾妻鏡』に最も登場例の多い動物である、鳩にまつわる記録である。現在でも鳩は八幡神の神使として広く知られており(二)、石清水八幡宮の一の鳥居や、鶴岡八幡宮上宮楼門に掲げられた「八幡宮」の扁額の「八」の字が、向かい合った二匹の鳩として描かれている事例などはよく知られたところだろう。また宇佐八幡宮で毎年行われる鳩替神事の他、全国各地の八幡宮において神使としての鳩が境内において偶像化されたり(三)、土産物のデザインとして使われたりする等の形で、鳩は八幡信仰の一部を担う存在として現代においては機能している。但し、本稿では現代におけるこうした鳩<sup>11</sup>八幡神使という図式あるいは先入観はひとまず脇に置く。あくまで『吾妻鏡』において鳩がどのような意味づけをなされた動物であったのかを論の中心に据え、史料を検討していくこととしたい。

## 第一章 愛玩動物や吉例・祥瑞としての鳩

### 第一節 研究史の成果と本稿の視点について

鳩と八幡神を関連付ける信仰の発生・発展に関する先行研究としては、曾我惠里加(三)と相良恭子(四)によるものがある。曾我は清和源氏の氏神としての八幡神という側面から、『平家物語』『曾我物語』『八幡愚童訓』における源氏と八幡神・鳩との関わりを示すエピソードを挙げる他、『今昔物語集』『梁塵秘抄』にみられる八幡神と鳩の関わりを紹介している。また相良は、鳩が八幡神の神使と見なされるようになった時期について、『古事談』や『大鏡』等の軍記物語における鳩の怪異や祥瑞の事例を紹介した上で、ひとまず『陸奥話記』を八幡神とその神使の鳩が描かれる古典作品の上限としている。

一方『吾妻鏡』に描かれる鳩に関する先行研究は管見の限り存在せず、『吾妻鏡事典』に事例紹介がなされるに留まる(五)。また、曾我と相良の先行研究はあくまで八幡信仰研究の一側面としての意味合いが強

表1 「吾妻鏡」鳩 関連記事一覧

番号*1	年月日*2	内容*3	占断・意味判断・感想*4	対応・結果など
史料四	文治元(1185)／ 4／21	梶原景時が親類に差出したという書状の内容を引用。埋ノ浦で平氏宗家の人々が入水する際、その屋形船の上を二羽の鳩が舞っていたという。	—	—
史料五	文治五(1189)／ 7／8	千葉常胤が奥州藤原氏征討のため新調した御旗を献上する。旗の上部には「伊勢大神宮 八幡大菩薩」と記し、その下に向かい合った二羽の鳩が描かれている。	常胤が治承四年に頼朝軍に参じた後、諸国が帰往したことを佳例として、旗の新調を彼に命じた。	旗に対して鶴岡八幡宮におおいて七日間の加持を行った。
史料六	建仁二(1202)／ 8／18	午刻、鶴岡若宮の西の回廊に鳩が飛来し、数刻にわたりに飛び去らなかつた。	供僧らが怪しみ、原朝臣法橋・大寺房らが門各講を修す。將軍源頼家が北条時政・大江広元とともにこれを見守。その他貴賤の者が大勢集まった。	酉刻、鳩は西方へと飛び去った。
史料七	建仁三(1203)／ 6／30	辰刻、鶴岡若宮宝殿の棟にいた一羽の唐鳩が突然地に落ちて死んだ。	人々がこれを怪しんだ。	—
史料八	建仁三(1203)／ 7／4	未刻、鶴岡八幡宮の経所と回廊の縁部の上から、三羽の鳩が食い合い合いながら落ちてきて、うち一羽が死んだ。	—	—
史料九	建仁三(1203)／ 7／9	辰刻、鶴岡八幡宮寺の間伽藍の下に、首の切れた鳩が一羽死んでいた。	このようなことは先例がないと供僧が申し上げた。	(七月二十日以降、頼家が「靈神之祟」により病悩、後継問題に発展)
史料一	承元二(1208)／ 10／21	京から帰参した東重胤の報告で、先月二十七日に朱雀門が焼亡した。原因は、近年天子上皇がこぞつて鳩を飼うことを好むため人々が奔走し、朱雀門に棲む鳩を捕らえようとして松明の火が燃え移ったものである。	—	—
史料十	承久元(1219)／ 1／25	源頼茂が前夜から鶴岡八幡宮に参籠した際、小童が鳩を打ち殺す夢想を得た。今朝、八幡宮の庭に鳩の死骸があつた。	人々がこれを怪しんだ。安倍泰貞・安倍宣賢が不快な知らせであると占断の結果を申し上げた。	—
史料十一	承久元(1219)／ 1／27	実朝が將軍御所南門を出る際、霊鳩がしきりに囀った。	—	(この日、鶴岡において公暁により美朝暗殺)
史料十二	寛喜三(1231)／ 1／20	鶴岡別当法印(定観)が御所に申し入れ、鶴岡宮の石段の西にある梅の木に山鳩が二羽おり、八日間も飛び去らないという。	—	御占の結果、將軍、将軍、八幡宮御で口舌鬭争を戦むようになるとの結果(二月二十三日)

\*1 本論中に引用してある場合の史料番号に対応する。

\*2 年月日は『吾妻鏡』条文の日付で示す。

\*3 「」内は『吾妻鏡』原文。( )内は備考及び関連記事の条文日時を示す。

\*4 「」内は『吾妻鏡』中に該当する記載なし。

いが、本稿では鎌倉幕府政治史との関連から、人々に怪異または祥瑞として、鳩に対して人々の抱いた印象や『吾妻鏡』が与えた意味づけに着目して論を進めることとしたい。その上で、結論を先取りして述べるならば、『吾妻鏡』における鳩に関する記事の大半が源氏將軍三代の時期に集中し、合戦に際しては鳩が祥瑞として機能する一方、頼家交代や実朝暗殺の直前には不吉な鳩の記事が集中するなど、明らかに「源氏將軍と鳩（とその背後にある八幡神の神威）の結びつき」という意味付けを『吾妻鏡』は演出している。表1は、『吾妻鏡』における鳩に関する記事を網羅した一覽表である。

## 第二節 愛玩動物としての鳩

本稿で考察対象とするのは鎌倉時代だが、少なくとも院政期の社会において、既に皇族・貴族階層において鳩は愛玩動物として飼育されていた<sup>(一六)</sup>。例えば『台記』には、康治二年（一一四三）、藤原頼長が崇徳上皇から「家鳩」を賜った（頭が長く色が白く、頭部に冠があり、足に毛が生えてよく人に馴れている、と

ある）例が見える<sup>(一七)</sup>。

承元二年（一二〇八）九月二十七日夜、朱雀門が焼失する火災が発生した（『明月記』<sup>(一八)</sup>『猪隈関白記』<sup>(一九)</sup>『百練抄』<sup>(二〇)</sup>）。その出火原因は門の上に巢をかけた鳩を取ろうとして松明の火が燃え移ったものという。以下は、その様子を京から東重胤が鎌倉に報告した『吾妻鏡』の記事である。

史料一 『吾妻鏡』承元二年十月二十一日条

廿一日丁亥。東平太重胤（号<sub>三</sub>東所）遂<sub>三</sub>先途<sub>二</sub>、自<sub>三</sub>京都<sub>二</sub>歸參。即被<sub>レ</sub>召<sub>三</sub>御所<sub>一</sub>、申<sub>二</sub>洛中事等<sub>一</sub>。（中略）次去月廿七日夜半、朱雀門焼亡。常陸介朝俊（朝隆卿末孫。弓馬相撲達者）取<sub>三</sub>松明<sub>二</sub>昇<sub>レ</sub>門、取<sub>二</sub>鳩子<sub>一</sub>歸去之間、件火成<sub>二</sub>此災<sub>一</sub>。凡近年 天子 上皇悉令<sub>レ</sub>好<sub>レ</sub>鳩給。長房、保教等本自養<sub>レ</sub>鳩、得<sub>レ</sub>時兮殊奔走云々。（後略）

重胤の報告によれば、近年天子（土御門天皇）・上皇（後鳥羽上皇）が鳩を好むために人々が鳩を養うなど奔走していたことが火災の背景にあるという。『明月

記』には同様に土御門天皇・後鳥羽上皇が鳩を好んでいたこと、『猪隈関白記』には巢をかけていた鳩について「唐鳩」とあり、これを取ることが後鳥羽院の命であったと記録する。

その他『吾妻鏡』中に見える鳥の飼育の例としては、嘉禎四年（一二三八）の將軍藤原頼経の上洛中、頼経の弟福王が、種類は判然としないものの「小鳥」を飼っているとの例がある（二一〇）。

### 第三節 鳩がもたらす吉例・祥瑞

『延喜式』治部省式の段階で、白鳩は祥瑞の一つとして大・上・中・下の四段階のうち中瑞と規定されており、『統日本紀』では、文武天皇三年（六九九）に河内国から、養老四年（七二〇）（二二）に大宰府からそれぞれ白鳩が献上された例などがある。が、これは鳩に限ったことではなく、通常と異なつた体色の動物は多く祥瑞と見なされたものである。ただし、そこに八幡神との関連性を見出すことは出来ない。

八幡神・鳩・清和源氏という三点を結ぶ史料の古い例としては、先述した相良の先行研究（三三）の通り、

『陸奥話記』<sup>（二四）</sup>まで遡ることができよう。この軍記物語では二つの場面で鳩が登場する。

#### 史料一 『陸奥話記』

於<sub>レ</sub>是武則遙<sub>レ</sub>拜皇城<sub>一</sub>、誓<sub>レ</sub>天地<sub>一</sub>言。臣既<sub>レ</sub>免<sub>レ</sub>子弟<sub>一</sub>、  
必<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>空生<sub>一</sub>。志在<sub>レ</sub>立<sub>レ</sub>節。不<sub>レ</sub>顧<sub>レ</sub>殺<sub>レ</sub>身。若不<sub>レ</sub>苟死<sub>一</sub>、  
必<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>空生<sub>一</sub>。八幡<sub>三</sub>所照<sub>二</sub>臣中丹<sub>一</sub>。若惜<sub>レ</sub>身命<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>  
致<sub>レ</sub>死力<sub>一</sub>者、心中<sub>二</sub>神鑄<sub>一</sub>先死矣。合<sub>二</sub>軍旅臂<sub>一</sub>一時激  
怒。今日有<sub>レ</sub>鳩翔<sub>二</sub>軍上<sub>一</sub>。將軍以下悉<sub>レ</sub>拜<sub>レ</sub>之。

#### 史料三 『陸奥話記』

（康平五年（一〇六二）九月）十七日。未時、將軍  
命<sub>二</sub>士卒<sub>一</sub>曰、各入<sub>二</sub>村落<sub>一</sub>壞<sub>二</sub>運屋舍<sub>一</sub>填<sub>二</sub>之城湍<sub>一</sub>。又  
每<sub>レ</sub>人<sub>レ</sub>茹<sub>二</sub>萱草<sub>一</sub>積<sub>二</sub>之河岸<sub>一</sub>。於<sub>レ</sub>是壞<sub>二</sub>運茹積須臾如<sub>レ</sub>  
山。將軍下馬遙<sub>二</sub>拜皇城<sub>一</sub>誓<sub>レ</sub>言。昔漢德末<sub>レ</sub>衰飛泉忽  
應<sub>二</sub>校尉之節<sub>一</sub>。今天威惟新。太風可<sub>レ</sub>助<sub>二</sub>老臣之忠<sub>一</sub>。  
伏乞、八幡<sub>三</sub>所出<sub>二</sub>風吹<sub>レ</sub>火燒<sub>二</sub>彼柵<sub>一</sub>。則自取<sub>レ</sub>火称<sub>二</sub>  
神火<sub>一</sub>投<sub>レ</sub>之。是時有<sub>レ</sub>鳩翔<sub>二</sub>軍陣上<sub>一</sub>將軍再拜。暴風  
忽起煙炎如<sub>レ</sub>飛。先<sub>レ</sub>是官軍所<sub>レ</sub>射之矢立<sub>二</sub>柵面<sub>一</sub>樓頭<sub>一</sub>  
猶如<sub>二</sub>蓑毛<sub>一</sub>。飛炎隨<sub>レ</sub>風着<sub>二</sub>矢羽<sub>一</sub>。樓櫓屋舍一時火

起。城中男女数千人、同音悲泣。賊徒潰乱、或投<sub>レ</sub>身於碧潭<sub>一</sub>、或刎<sub>レ</sub>首於白刀<sub>一</sub>。官軍渡<sub>レ</sub>水攻戰。是時賊中敢死者数百人。被<sub>レ</sub>甲振<sub>レ</sub>刀突<sub>レ</sub>圍而出。必死莫<sub>レ</sub>生心<sub>一</sub>。官軍多<sub>レ</sub>傷死者<sub>一</sub>。武則告<sub>レ</sub>軍士曰、開<sub>レ</sub>圍可<sub>レ</sub>出<sub>レ</sub>賊衆<sub>一</sub>。軍士開<sub>レ</sub>圍。賊徒忽起<sub>レ</sub>外、心不<sub>レ</sub>戰而走。官軍橫擊悉殺<sub>レ</sub>之<sub>一</sub>。

史料二では、清原武則が源頼義の軍勢に参加し、忠誠と奮闘を八幡神に宣誓する場面で、軍勢の上を鳩が飛び、頼義らがこれを拝んだとある。史料三では、安倍氏最後の拠点である厨川柵・姫戸柵の戦いにおいて、火攻めをかけようとする頼義軍の上に鳩が現れて頼義がこれを再拝すると、暴風が起きて火はたちまちに燃え広がったとある。『陸奥話記』は十一世紀後半の作と推定されているが、少なくともその時期までには、史料二・三のように、八幡神と鳩、それに清和源氏を関連付ける思想が形成されていたと考えられる。

一方、『吾妻鏡』に鳩が登場する初例は、壇ノ浦合戦直後の文治元年（一一八五）四月二十一日条に記される。ここでは鎮西で従軍中の梶原景時から鎌倉の一

族へ宛てた書状を引用したものととして、平氏征討中に源氏軍に起こったとする様々な祥瑞が記録されている。

史料四 『吾妻鏡』 文治元年四月二十一日条  
廿一日甲戌。梶原平三景時飛脚自鎮西參着。差<sub>レ</sub>進親類<sub>一</sub>、献<sub>レ</sub>上書状<sub>一</sub>。始申<sub>レ</sub>合戦次第<sub>一</sub>、終訴<sub>レ</sub>廷尉不義事<sub>一</sub>。其詞云、

西海御合戦間、吉瑞多<sub>レ</sub>之。御平安事、兼神明之所<sub>レ</sub>示<sub>レ</sub>祥也。所以者何。先三月廿日、景時郎従海太成光夢想<sub>二</sub>、淨衣男捧<sub>レ</sub>立文<sub>一</sub>テ来。是ハ石清水御使カト覚エ、披見之處、平家ハ未ノ日可<sub>レ</sub>死ト載タリ。覚之後、彼男相語ル。仍未日相構テ可<sub>レ</sub>決<sub>レ</sub>勝負<sub>一</sub>之由、存思之處、果而如<sub>レ</sub>旨。又攻<sub>レ</sub>落屋嶋<sub>一</sub>戰場之時、御方軍兵不<sub>レ</sub>幾。而二数万勢マホロシニ出現シテ、敵人ニ見云々。次去々々、長門国合戦之時、大亀一出来。始ハ浮<sub>レ</sub>海上<sub>一</sub>、後ニハ昇<sub>レ</sub>陸。仍海人恠<sub>レ</sub>之、參河守殿御前ニ持參。以<sub>レ</sub>三六人力<sub>一</sub>、猶持煩之程也。于<sub>レ</sub>時可<sub>レ</sub>放<sub>レ</sub>其甲<sub>一</sub>之由、相議之處、先<sub>レ</sub>之有<sub>レ</sub>夢之告<sub>一</sub>。忽思合トテ、參河守殿加<sub>レ</sub>制禁<sub>一</sub>テ、剩付<sub>レ</sub>簡テ被<sub>レ</sub>放遣<sub>一</sub>畢。然臨<sub>レ</sub>平氏最後<sub>一</sub>ニ、件亀再浮<sub>レ</sub>出于源氏船前<sub>一</sub>



（レ）簡知之。次白鳩二羽、翻舞于船屋形上。當其時、平氏ノ宗ノ人々入海底。次周防国合戦之時、白旗一流出、現于中虚。暫見御方軍士眼前。終二収雲膚畢。

景時によれば、平家征討の軍中、「景時郎党の夢想に石清水八幡宮の御使が現れ、平氏は未の日に滅ぶと夢告した（なお壇ノ浦合戦は『吾妻鏡』文治元年三月二十四日に記され、この日は丁未に当たると）」「屋島合戦の際、数万の味方兵の幻影が現れた」「長門国で捕らえ放生した亀が、壇ノ浦で源氏軍の船の前に現れた」という祥瑞に恵まれたという。そして鳩に関する祥瑞として挙げられているのは、「壇ノ浦にて平氏宗家の人々が海に没しようとする時、屋形船の上を二羽の鳩が舞っていた」というものである。

極めて都合のよいこれら祥瑞の数々は、史実として文面通りに受け取ることには出来ない。景時の創作である可能性もあるが、『吾妻鏡』編纂の際に編者が景時の口を借りて、源氏軍の正当性を主張する挿話を語らせたと考えることもできる。

但し注目されるのは、この平氏征討中に発生した祥瑞について『吾妻鏡』だけでなく『鶴岡社務記録』（二五）でも触れられている点である。その記述は建武三年（一二三三）、「鶴岡社務頼仲が、世上御祈のため鶴岡上宮に百日參籠を行った際に、夢告を得た場面で言及される（二六）。この十月十日条の裏書に、梶原景時の郎従の夢に石清水の御使が現れ、未の日に平家は滅亡すると告げたという『吾妻鏡』と同様の内容が先例として紹介されている。従って、景時が鎌倉に伝えたときれるこの伝説は、実際に景時がそのような書状を送ったのか、『吾妻鏡』編纂時に創作されたものか、あるいはその二つの時期の間に形成されていったものかは不明だが、建武年間においても源氏に対する八幡神の加護を示す先例として語り継がれていたことが分かる。『吾妻鏡』の同条に記される亀や鳩の祥瑞については『鶴岡社務記録』では触れられていないが、夢想の例とともに語り継がれていた可能性は高いのではないだろうか。

さらに、史料二～四のような伝説・挿話的な形での鳩の祥瑞ではなく、鳩を縁起の良い意匠として鎌倉幕

府が積極的に使用した例も存在する。

史料五 『吾妻鏡』 文治五年七月八日条

八日丙寅。千葉介常胤献「新調御旗」。其長任「入道将軍家」(頼義)「御旗寸法」、一丈二尺二幅也。又有「白糸縫物」。上云、伊勢大神宮、八幡大菩薩云々。下縫「鳩二羽」(相對云々)。是為「奥州追討」也。治承四年、常胤相「率軍勢」、參向之後、諸国奉「帰往」。依「其佳例」、今度御旗事、別以被「仰」之。絹者小山兵衛尉朝政進「之」。先祖将軍輒亡「朝敵」之故也。此御旗、以「三浦介義澄」為「御使」。被「遣」鶴岡別當坊「於「宮寺」。七ケ日可「令」加持「之由被」仰云々。

奥州征討を前に、千葉常胤が新調した御旗を献上し(頼朝拳兵の際常胤の参陣を契機に諸国が帰往したことを佳例としての指名という)、御旗は鶴岡において七日間の加持を受けるといふ。その御旗には、伊勢大神宮と八幡大菩薩の文字が描かれ、その下に向かい合った二羽の鳩が刺繍されているとある。

なお、現存する永青文庫の所蔵品の錦旗(写真1)(二七)と比較した場合、史料五に記されるような神号の下の鳩の刺繍こそないものの、天照大神と八幡神を並記するデザインは『吾妻鏡』と共通している。一



写真1 錦旗  
(後小松天皇下賜・永青文庫所蔵)

一般的な御旗のデザインに八幡神の使である鳩を加え、幕府の信仰の中心である鶴岡で加持に供することで、旗に特に八幡神の神威・加護を籠めようとしたものであるう。

以上の通り、『陸奥話記』における前九年合戦での鳩の祥瑞を古い例として、『吾妻鏡』においても、鎌倉方の平家征討の途上には数々の祥瑞が絡み、その中には鳩も含まれていた。そして、これらの伝説に留まらず、実際に奥州征討においては鳩の意匠を取り入れた御旗が製作されていた。このような形で清和源氏の勝利の背景に八幡神の加護があり、鳩はその象徴として存在感を強めていったものといえるだろう。

## 第二章 凶兆・怪異としての鳩

### 第一節 源頼家の将軍交代と鳩の凶兆

第一章では身近な愛玩動物として、また戦において八幡神の加護の象徴として勝利をもたらす存在としての鳩の側面を紹介した。一方、そうした存在である鳩が死んだり、奇妙な行動を取ったりすることは逆に凶

兆・怪異として捉えられた。

史料五の後、頼朝期の『吾妻鏡』の記述に、鳩に關するものはない。次に鳩が登場するのは源頼家が二代将軍に就任した建仁二年（一一二〇）の例である。

史料六 『吾妻鏡』建仁二年八月十八日条

十八日己丑。晴。午剋、鶴岳若宮西廻廊鳩飛來。數剋不立避。仍供僧等恠之。眞智房法橋、大学房等、修三門答講一座、令法學之。將軍家爲見聞參給。遠州大官令等扈從。其外貴賤成市。及西剋、件鳩指三西方飛去云々。

ここでは、鶴岡八幡宮に飛來した鳩が數刻に渡り飛び去らず、供僧らがこれを怪異として講を修したとある。この史料六の例を皮切りに、表一の通り、鳩が『吾妻鏡』に登場する場合は常に不吉・凶兆・怪異といった良くない報せとして描かれるようになる。

史料六の翌年の建仁三年（一一二三）には、六月下旬から七月上旬にかけて三件の鳩に關する怪異が發生した。

史料七 『吾妻鏡』建仁三年六月三十日条

卅日丙寅。辰尅、鶴岳若宮宝殿棟上、唐鳩一羽居。頃之頓落<sub>レ</sub>地<sub>二</sub>死<sub>一</sub>畢。人奇<sub>レ</sub>之。

史料八 『吾妻鏡』建仁三年七月四日条

四日庚午。未尅、鶴岳八幡宮、自<sub>二</sub>經所与下廻廊造合之上<sub>一</sub>、鶴三喰合落<sub>レ</sub>地。一羽死。

史料九 『吾妻鏡』建仁三年七月九日条

九日乙亥。辰刻、同宮寺闕伽棚下、鳩一羽頭切而死。此事無<sub>二</sub>先規<sub>一</sub>之由、供僧等驚申<sub>レ</sub>之。

三例とも、形は違えども鶴岡八幡宮において鳩の死骸が発見されたという事例である。そして、直後の七月下旬より頼家は病悩するようになり(二八)、同年九月には、いわゆる比企能員の乱、一幡の謀殺、実朝の將軍就任と頼家の幽閉へと至るのは周知の通りである。史料七〜九の三例の鳩怪は、この一連の將軍交代に関する混乱の凶兆であったとして『吾妻鏡』に記録された可能性が高いと言えるだろう。

また、史料六の鳩が飛び去らなかつた例では、鶴岡供僧らが講を修する対応を行い、將軍頼家もこれに臨

席したとあるが、鳩の死骸が鶴岡で発見された史料七〜九には、修講・奉獻・解謝等の特別な対応が取られた形跡が『吾妻鏡』に残されていない。然るべき対応は当時取られたものの何らかの理由で採録されなかつた可能性もあるが、何も対応がなされなかつたのだとすれば不審が残る。あるいは「頼家の交代劇は鳩を通じて八幡神も警告を行っていた」と強調するために、史料七〜九の話そのものが捏造された可能性も考えられる。

## 第二節 源実朝の暗殺と鳩の凶兆

鳩が八幡神使として幕府の危急を予告した最大の例と言えるのは、建保七年(一一一九)正月の実朝暗殺に関わるものだろう。暗殺直前の同年正月二十五日条と、暗殺当日の正月二十七日条の暗殺直前の正月二十五日条の二度、鳩に関する凶兆の記事が見える。

史料十 『吾妻鏡』建保七年正月二十五日条

廿五日壬辰。右馬権頭頼茂朝臣參籠于鶴岡宮。去夜跪拜殿、奉<sub>二</sub>法施<sub>一</sub>之際、一瞬眠中、鳩一羽居

典厩之前。小童一人在其傍、小時童取杖打殺彼鳩。次打典厩狩衣袖。成奇異思曙之處、今朝廟庭有死鳩。見人怪之。頼茂朝臣依申事由、有御占。泰貞、宣賢等申不快之趣云々。

史料十一 『吾妻鏡』建保七年正月二十七日条

(前略)抑今日勝事、兼示變異事非一。所謂、及御出立之期、前大膳大夫入道參進申云、覺阿成人之後、未知涙之浮顔面。而今奉昵近之處、落涙難禁。是非直也事。定可有子細歟。東大寺供養之日、任右大將軍御出之例、御束帶之下、可令着腹卷給云々。仲章朝臣申云、昇大臣大將之人未有其式云々。仍被止之。又公氏候御鬢之處、自拔御鬢一筋、称記念賜之。次覽庭梅、詠禁忌和歌給。

出テイナハ主ナキ宿ト成ヌトモ軒端ノ梅ヨ春ヲワスルナ

次御出南門之時、靈鳩頻鳴囀。自車下給之刻被突折雄劍云々。(後略)

暗殺二日前の史料十では、鶴岡に参籠した源頼茂の夢に一羽の鳩と小童が現れ、童が杖で鳩を打ち、次いで頼茂の狩衣の袖を打つという夢想を得たという。朝になると鶴岡の庭に鳩の死骸があり、人々が怪しんだという。また暗殺当日の正月二十七日条に記される史料十一では、実朝が御所南門を出る時、「靈鳩」がしきりにさえずり、車から降りる際には剣が折れたとある。

この実朝暗殺に係る二例の鳩の怪異のうち、史料十の例では辛うじて安倍泰貞・安倍宣賢という当時幕府陰陽師として仕えていた(二九)二人が式占を行い、不快の由を示したという記述はあるものの、実際に発生したものはそれ以上確認しようもない。いづれにせよ、八幡神が鳩を通じて將軍実朝に危機を予告しており、その神意を察することができなかった故に実朝は暗殺された、という構図がここでは生み出されている。頼家の交代と同様、実朝の暗殺をも八幡神は鳩を通じて予告していたと『吾妻鏡』は語っているのである。

### 第三節 源氏將軍の終焉と鳩に関する記事の消滅

実朝の暗殺後、『吾妻鏡』に鳩が登場するのは次が唯一の例で最後となる。

史料十二 『吾妻鏡』寛喜三年正月二十日条

廿日丁未。卯刻、鶴岡別當法印申入御所云、當宮石階西辺有「梅木」。山鳩二居「彼樹」。今日八箇日未立去云々。

鶴岡八幡宮の石段の西にある梅の木に二羽の鳩が留まり、八日間も飛び去らないという。この件に関しては、次の史料十三の通り、一ヶ月以上が経過した二月二十三日になって、御占の結果將軍側の不快ではなく、八幡宮の側で口舌鬩諍を慎むようにとの兆であると占断されている。

史料十三 『吾妻鏡』寛喜三年二月二十三日条

廿三日庚辰。為將軍家御祈、於鶴岳八幡宮宝前、被<sub>レ</sub>行仁王会。去月十三日以後八ケ日、山鳩集<sub>二</sub>宮寺石階下梅木<sub>一</sub>不立去事、被<sub>レ</sub>行御占之處、非<sub>二</sub>

上方御慎。宮寺可<sub>レ</sub>慎口舌鬩諍之由、占申訖云々。

このように、將軍藤原頼経と鳩怪との関連は明確に否定されている。

史料十二・十三の時期以降も、鎌倉における陰陽師の活動は益々活発となり、様々な怪異が『吾妻鏡』に記される一方で、鳩に関する記述は全く見えなくなる。よって、吉兆・祥瑞にせよ凶兆・怪異にせよ、鳩は源氏三代に強く結び付けられた存在であり、頼朝の戦勝においては吉兆として、頼家の交代や実朝の暗殺においては凶兆として、それぞれ八幡神の予兆や警告を告げ知らせる存在として『吾妻鏡』では位置づけられていたと考えられるのである。

### おわりに

『陸奥話記』において、鳩を通じて八幡神の神威を得、前九年合戦に勝利した源頼義は八幡宮を鎌倉に勧請し、それを源頼朝が都市鎌倉の中心として鶴岡八幡宮として整備した。その鶴岡を中心に、ほぼ源氏三代

の將軍の時代にのみ鳩が登場していることで、『吾妻鏡』の描こうとした鳩への意味付けは明確になったと言えるだろう。すなわち、頼朝時代は平家・奥州追討の吉兆として、頼家・実朝時代には將軍交代の凶兆として、吉凶を問わず八幡神の神意を伝える存在とされ、逆に源氏三代以降はほぼ描かれないうことで、八幡神・鳩・清和源氏の結びつきが明確になっているのである。

今後の課題としては、なぜ鳩が八幡神の神使として用いられるようになったのかという疑問、また現在『陸奥話記』の十一世紀後半まで遡ることができる八幡神使としての鳩への意味づけは、どこまで古く遡ることができるのかという疑問等が挙げられよう。引き続き検討を進めたい。

## 註

(一) 従来、註(二)の木村論を踏襲して鎌倉幕府による陰陽道の本格的受容は実朝期以降とするのが一般的な見方であったが、下村周太郎「鎌倉幕府の成立と陰陽師」(『年報中世史研究』33、二〇〇八)では頼朝期の陰陽道の発展に着目してい

る。

(二) 木村進「鎌倉時代陰陽道の一考察」(『立正史学』29、一九六五)において、木村は鎌倉陰陽道の発展経過を治承四年(一一八〇)→承元三年(一二〇九)の初期模倣時代、承元四年(一二二〇)→建保六年(一二二八)の本格的受入時代、承久元年(一二二九)→寛元三年(一二四五)の第三期極盛時代、寛元四年(一二四六)以降の第四期極盛時代と四段階に分類している。

(三) 鎌倉幕府内での鶴岡八幡宮の宗教的位置・役割に関しては、江部陽子「鶴岡八幡宮発展の三階梯と源頼朝の信仰」(『神道学』63、一九六九)、吉田通子「鎌倉期鶴岡八幡宮寺の宗教的位置とその役割について」(『日本仏教史学』21、一九八六)など。

(四) 村山修一「関東陰陽道の成立」(『史林』49-4、一九六六)において、鎌倉陰陽道の京都からの独自性が指摘され「鎌倉陰陽師」の語が用いられた。

(五) 例えば、伊勢本宮正殿の棟木に蜂が巣を作った例(養和元年十月二十日条)、美濃国時田荘で夏に降雪を記録した例(寛喜二年六月十六日条)、石清水八幡宮高良社の神体が鳴動した例(天福元年五月二十四日条)など。高良社の例は京からの報告に留まるものの、伊勢本宮の例では幕府が神馬・砂金等を伊



勢に奉納し、美濃国降雪の例では北条泰時が徳政を指示するなど、場合によっては鎌倉以外の土地で発生した現象であっても、幕府が何らかの政治行動を取った事例も存在する。

(六)

朝廷においては神祇官の卜部による亀卜と、陰陽寮の陰陽師による六壬式占とを並行して実施させ、その結果をそれぞれ勘申させる軒廊御卜が最も高位のうらないの方法であったが、亀卜は朝廷以外が用いることが禁じられ、鎌倉幕府は専ら陰陽師を勘申のために用いた。軒廊御卜については西岡芳文「六壬式占と軒廊御卜」(今谷明編『王権と神祇』思文閣出版、二〇〇二)、六壬式占の方法論については、小坂眞二「物忌と陰陽道の六壬式占―その指期法・指方法・指年法―」(古代学協会編『後期撰関時代史の研究』吉川弘文館、一九九〇)、「陰陽道の六壬式占について…その六壬課式720局表」(上)(中)(下)『古代文化』38(7)〜(9)、一九八六、「十一世紀代の怪異六壬式占文について」(上)(下)、『東洋研究』171・175、二〇〇九・二〇一〇)などがある。亀卜については東アジア怪異学会編『亀卜』(臨川書店、二〇〇六)など。

(七)

鎌倉幕府における陰陽道の成立と発展については、村山註(四)のほか、村山修一『日本陰陽道史総説』(瑞書房、一九九一)、『陰陽道叢書 二 中世』(名著出版、一九九三)、赤澤

春彦『鎌倉期官人陰陽師の研究』(吉川弘文館、二〇一二)など。

(八)

二〇〇一年、西山克・戸田靖久らを発起人として東アジア怪異学会が設立された。怪異に関する総論としては、西山克「怪異のポリテクス」(東アジア怪異学会編『怪異学の技法』(臨川書店、二〇〇三) 東アジア怪異学会編『怪異学入門』(岩田書院、二〇一三) など)。

(九)

谷口榮「鎌倉を取り巻く生き物たち」(佐藤和彦・谷口榮編『吾妻鏡事典』東京堂出版、二〇〇七)。

(一〇)

池田「吾妻鏡」の動物怪異と動乱予兆―黄蝶群飛と鷲怪に与えられた意味付け―(『常民文化』38、二〇一五)。

(一一)

現代における八幡神使としての鳩に関する伝承の一例を高田十郎編『増補版 大和の伝説』(大和史蹟研究会、一九六〇)、『大和の伝説』は一九三三初版)より引用しておく。

「神功皇后の三韓征伐には、大安寺から出発された。その時、応神天皇がお生まれになったが、しかたがないから、大安寺の佐保川の西を流れるコモ川の堤にコモに包んで置いておかれた。コモ川という名も、それから出た。それを鳩が来て養育した。八幡宮に鳩がたくさん飼われるのは、その縁故だといふ。」

九州の宇佐八幡から行教和尚が、八幡神を勧請して帰る途



中、白い鳩が道案内についできた。僧行教は、『これは大安寺八幡宮を守るためにきてくれたのだ』と、大事にこの鳩を飼った。男山の八幡宮へおうつりになる時も、鳩が道案内をしたという。(どちらも奈良市大安寺町の伝承とする)

あくまで民間伝承であるため、そこに歴史的矛盾は発生しうるものとして、全国の八幡宮に社伝として伝わる八幡神と鳩の縁故は、おおむね引用したような類型のものであろう。

(一一) 現代の全国の八幡宮における鳩の偶像化については、福田

博通『神使になった動物たち―神使像図鑑』(新協出版社、二

〇一二) 一六〇～一六四頁に実例が豊富に紹介されている。

(一二) 曾我惠里加「源頼朝」(神社と神道研究会『八幡神社 歴史

と伝説』勉誠出版、二〇〇三)。

(一三) 相良恭子「八幡の御使神の鳩」(神社と神道研究会『八幡神

社 歴史と伝説』勉誠出版、二〇〇三)。

(一四) 谷口註(九)。

(一五) 「鳩」はハト科の鳥類の総称的にも用いられるが、少なくとも

平安時代以降の人々は既に鳩を複数種に見分けていた。『倭

名類聚抄』十八には「鳩」について「和名夜萬八止」とあり、

元々の鳩とは現在でいうヤマバト(キジバト)を指した。現

代の我々が杜寺境内などでもっともふつうに目にするドバト

(カワラバト)は家禽化されたハトが再野生化した種であり、

特に区別する場合は「鶴」の字を用いた。平安時代末期成立の『伊呂波字類抄』では「鳩 山鳩」「鶴 家鶴」と区別がなされている。(参考文献・細川博昭『江戸時代に描かれた鳥たち 輸入された鳥、身近な鳥』(ソフトバンククリエイティブ、二〇一二))

(一七) 『台記』康治二年(一一四三)三月九日条。

(一八) 『明月記』承元二年(一二〇八)九月二十七～二十八日条。

(一九) 『猪隈関白記』承元二年九月二十八日条。

(二〇) 『百練抄』承元二年九月二十七日条。

(二一) 『吾妻鏡』嘉禎四年(一二三八)五月十六日条。この条文は、

逃げ出した小鳥を、頼経の命を受けた上野十郎朝村が、加工を施した矢を用いて小鳥を傷つけずに捕らえ褒賞を得たという説話的内容になっている。これに酷似した例として、『吾妻鏡』承元元年十二月三日条がある。これは將軍御所に侵入した青鷲を、実朝の命を受けた吾妻四郎助光が、鷲の目に矢羽のみをかすめて落とし、生け捕りにして褒賞を得たという内容である。前者の小鳥の飼育に関する部分はともかく、その後の捕獲の話については、こうした弓の名人にまつわる説話の類型があったと見るべきか。

(二二) 『続日本紀』文武天皇三年(六九九)三月九日条・養老四年

(七二〇) 正月朔日条。白鳩の献上は他にも例が見られる。

(二三) 相良註(一四)。

(二四) 『陸奥話記』は成立年代不詳ながら、藤原明衡が作者として推定されるなど十一世紀後半の作と目されている。

(二五) 『鶴岡社務記録』は、建久三年(一一九二)から正平十年(一一五五)までの鶴岡八幡宮歴代社務または別当の日記の編纂史料。筆者は初代別当円晁から一九代別当頼仲までに至る。

編纂年代は不詳。現在版本としては『改定史籍集覽』に所収。

(二六) 参籠中、頼仲の夢に「比叡山は(十月)十八日に陥落する」との告げがあり、百日参籠結願の十月十日に比叡山が陥落したという。この建武三年(一一三六)の頼仲の参籠の頃、後醍醐天皇が三種の神器と共に比叡山に立て籠もり、これを新田義貞らが守護していた。比叡山の陥落が夢告では十月十八日とされたのに対し実際には十月十日であったはずに関し、夢を見た時刻が丑八ツであったために十日と合わせて十八となったのだろう、と頼仲は解釈を加えている。

(二七) この錦旗は、明德二年(一一三九)細川頼有が後小松天皇から下賜された品と伝わる。

(二八) 『吾妻鏡』建仁三年(一一〇三)七月二〇日条。

(二九) 鎌倉幕府に仕えた陰陽師各員の活動状況については赤澤春彦「陰陽師と鎌倉幕府」(『日本史研究』496、二〇〇三)に詳しい。(赤澤註(七)にも所収)